

西南学院大学博物館 テーマ展示

聖書植物園のあゆみ

リーフレット

2023

3/14
(火)

5/22
(月)

会場 西南学院大学博物館 1階廊下
主催 西南学院大学博物館
協力 小林洋一（西南学院大学名誉教授）
聖書植物園ボランティア

西南学院大学



西南学院大学博物館
SEINAN GAKUIN UNIVERSITY MUSEUM

発行：西南学院大学博物館
〒814-8511
福岡県福岡市早良区西新3丁目13番1号
編集：栗田 りな（西南学院大学博物館学芸調査員）
勝野みずほ（同）
発行日：2023年3月14日



開催概要

西南学院大学の構内に点在するように広がる「聖書植物園」には、聖書に登場する多くの種類の植物が収集されている。本植物園は、開園当初から多くの人々によって管理・維持され、発展してきた。

本展示では、聖書植物園が作られるに至った経緯から、今までの聖書植物園の歩みを、聖書植物園の開園に携わった人々や団体、維持に貢献している人々や団体の活動とともに紹介する。また、聖書植物園の歴史にとって、特に記念となる聖書植物をいくつか紹介する。

1. 聖書植物園の設立

聖書植物園は 1999 年 11 月に西南学院大学開学 50 周年記念事業としてキャンパス内に開園した。以来、徐々にその規模を広げていき、現在では 100 種以上の聖書植物が展示されている。その中から、社会福祉学科の開学 10 周年に植樹されたイタリアイトスギや、西南学院建学 100 周年記念に植樹されたレバノンスギなどの聖書植物を、歴代のパンフレットとともに紹介する。

左：レバノンスギ/レバノン杉（本館前）

学名 *Cedrus libani*
列王記下 19:23 参照

右：イタリアイトスギ/糸杉（クロスプラザ前）

学名 *Cupressus sempervirens*
サムエル記下 6:5 参照



2. 聖書植物園とボランティア

聖書植物園の管理運営は開園当初からしばらくの間、園芸専門業者社「メイポップ」による生育管理等の作業、学生アルバイトによって担われてきた。しかし、植物の数が増加するに伴い、「聖書植物園ボランティア」や社会福祉施設「アベル」が草取りに参加するようになった。

2004 年に発足した月に一度の「聖書植物園ボランティア」の活動は草取りから伸びすぎた枝の剪定、土起こし、肥料やりと多岐にわたる。その作業内容を季節ごとに、関係の深い植物とともに紹介する。



左：聖書植物園ボランティアの剪定作業の様子

右：聖書植物園ボランティアの草取りの様子



3. 聖書植物園の取り組み

聖書植物の中には福岡でも越冬することができないものも多い。そこで冬の間は専門業者に温室管理を委託し、室内で保管をするために鉢植えにしたり、成長してそれが困難な場合は展示2で紹介した冬囲いをしたりするなどの対策がとられている。また、2018年に温室ができ、そこにいくつかの植物を展示している。高温多湿に弱い乾燥地帯の植物も多く、それらの植物は梅雨には根腐れに注意が必要である。それ以外にも、病気や風などの弱点を持つものも多く、それぞれの植物に合った細やかな管理が必要である。これらのような生育の難しい植物の栽培に成功していることも、聖書植物園の成果の一つであろう。

右：枝を剪定し、発泡スチロールで冬囲いしたイチジククワ
(2号館南側)
学名 *Ficus sycomorus*
ルカ福音書 19:2-5 参照



左：ムラサキゴジアオイ (大学博物館前)
学名 *Cistus creticus*



聖書植物園の沿革

- | | |
|-------|--|
| 1999年 | 11月に開園。12種の植物から始まる。 |
| 2001年 | 2月に「西南学院大学聖書植物園キャンパスマップ」発行。 |
| 2002年 | 西南学院大学聖書植物園管理・運営委員会発足。インターネット上での公開開始。 |
| 2003年 | 3月に新パンフレット（A3判二つ折り）発行。 |
| 2004年 | 11月頃に展示植物が72種に拡大。月1回の草取りボランティアがスタート。 |
| 2008年 | 社会福祉施設「アベル」が維持・管理に参加し始める。 |
| 2009年 | 3月に新パンフレット（A5判）発行。 |
| 2016年 | 5月の西南学院創立100周年記念式典に向けて「西南ゆりの会」が大学博物館前花壇に植えた「ゆり」の花が満開になる。 |
| 2017年 | 5月に『聖書植物園図鑑』（聖書植物園書籍・出版委員会編、丸善プラネット）出版。 |
| 2018年 | 2号館南側に温室が完成。 |
| 2019年 | 7月に新パンフレットの第2版発行。『聖書植物園図鑑』の第2版出版。 |

西南学院大学聖書植物園 —聖書で出会った植物とキャンパスで出会う—

西南学院大学名誉教授 小林洋一

歴史的に「カナン」、「イスラエル」、あるいは「パレスチナ」と呼ばれてきた聖書の地は、古代中近東の定住圏「肥沃な三日月地帯」の南西端にあたり、日本の四国程度の狭い地域ではあるが、地形や気候は変化に富み、北東の山岳地帯の高山植物から、南の乾燥地帯の砂漠植物に至るまで 2800 種以上の多様な植物が生育しているとされる。そのうちの 100 種を越える植物が聖書には登場する。

これらの聖書の植物を、可能な限りキャンパス内に収集・復元しようと、1999 年 11 月 13 日、「西南学院大学聖書植物園」が開園した。この聖書植物園は大学開学 50 周年記念特別事業として大学同窓会の寄付金を基にスタートしたものである。当初は 12 本の木々でスタートしたが、23 年後の現在、その展示植物は約 100 種を数えるまでになっている（含「野の花」や「香草」の複数候補の植栽）。

この植物園の特徴の一つは、聖書の植物がキャンパスの一角ではなく、キャンパス全体に広がって植えられていることである。そのため、見学者は、マップ付きの聖書植物園冊子を片手に、キャンパスを歩きめぐり、聖書の植物を訪ね歩くことになる。

さて、聖書は今から約 2000 年前の古文書なので、聖書の植物を復元するというこの聖書植物園の試みは、「緑の考古学」(green archaeology) (イスラエル国の聖書植物園「ネオート・ケドミーム」の用語) とでも言えると思う。しかし、2000 年前の植物を同定することは決して容易なことではない。古代には現代のような植物分類学が発達していなかったためである。

たとえば、ノアの箱舟の建材「ゴフェルの木」(創世記 6 章 14 節) とはどのような木なのか。老人を象徴する「アビヨナ」(コヘレトの言葉 12 章 5 節) とは、一体どのような植物なのか。疑問と興味は尽きない。

聖書に登場する植物の同定の困難さは日本語聖書の翻訳からも伺い知ることができる。当該植物が日本聖書協会発行の『聖書』(1955 年) と『聖書 新共同訳』(1987 年) では、異なる植物名で訳出されている場合がある。その場合、訳にしたがって、2 つの植物も展示している（なお、2018 年発刊の『聖書 聖書協会共同訳』には未だ対応していない）。そのためこの聖書植物園には、聖書の地にはない日本自生の植物も加えられている（現在の約「100 種」のなかにはそのようなものがいくつか含まれている）。それにより、見学者は、日本語聖書の訳があくまでも相対的なものであることを学ぶことになる。その意味で、この聖書植物園は、現地にあるものだけという厳密に限定された意味での「聖書植物園」ではなく、日本にある聖書植物園として、植物の同定あるいは聖書翻訳の困難さをも示す「学び」のための聖書植物園である。

「聖書植物園」といっても、その管理運営に専門の担当者がいるわけではなく、現在、その維持管理（担当：総務課）は、ガーデニングの専門業者の手助け、福祉作業所からの週 1 回の草取りのアルバイト、さらには市民、OG、OB、学生、教職員による月 1 回の草取りのボランティア活動等々によって担われている。この聖書植物園の成長・発展を見るにつけ、実に多くの人々の継続的活動と関わりがあってこそこの植物園であることを思わずにはいられない。

2017 年、聖書植物園の 17 年に及ぶ管理・運営を総括する意味で『聖書植物図鑑』(丸善プラネット) を出版した。この書の最大の特徴は、聖書の地ではなく、福岡の地の西南学院大学キャンパス内で植栽されている植物が収録されていることである。したがって、植物の写真も、すべて大学キャンパスで撮られたものである。好評をえて、2019 年に第 2 刷を発行した。